

序

『はじめの一步のイラスト〇〇学』シリーズに病理学を加えることとなった。人体の解剖、生理機能、生化学、免疫学、微生物学などを学び、いよいよ人の病気について勉強する。そのとき、ぜひ手にとって開いてもらいたい。

人体の構造と機能を勉強してきて、病気に移るといふ大事なところにさしかかって、どうにも勉強する意欲がわかなくなってしまう人も多い。どうしてだろう。それまでは、自分の知っている世界を、よりよく理解できる楽しみがあったかもしれない。自分の体の仕組みがわかる。素晴らしいことだ。感染症の原因である微生物についても敵の本体がわかる喜びがある。しかし、病理学に入ると、難解でとっつきにくい学術用語ばかり。病気の臓器、組織の写真を出されても、何がなんだかわからない。解説を読んでも、どこを指していて、どう変なのか、そしてそれが大変なことなのか、どうもピンとこない。「そういう皆さんに是非とも読んでみてほしい」。この本は皆さんの前に立って語りかけるように、重要なことをわかりやすいイラストを使って解説してもらった。読み進めれば、病気の種類、成り立ちの全体像がつかめるはずである。

医療関係の勉強をしている皆さんは、家族や友人から、病気について質問されることも多いだろう。いろいろな病気があり、まだまだ勉強を始めたばかりなので、という言い訳もできるかもしれない。ただ、困ったとき、この本を開いてみよう。どの章の病気なのか、見つけたら、その章を全部読んでみよう。そうすると病気の成り立ちが大筋で理解できる。病気というものは「得体の知れないもの」ではなくて、体の中に正常とは異なったことが起こっているが、それでも病気には規則があって、その振る舞いもある程度予想できることがわかる。各章には、実際の症例も紹介されている。そういう病気のとときに、どんなことが体の中に起きているか、それが理解できれば、病気になっている人を見る目が変わってくるはずである。

病気の種類がわかり、それぞれの成り立ちに見当もつくようになる。ただ、こうした病気の理解は、先人の大変な努力の積み重ねの結果でもある。病気の名前、用語には歴史があり、いろいろな誤解や思わぬつながりもある。まだわかっていないこともある。各章のコラムでは、専門の先生ならではの、話が聞ける。この本を楽しむ一つの方法かもしれない。

最後に、この本では、各臓器の病気の詳細については、あえて立ち入らなかつた。いきなり大辞典の項目の中に入っていくのは大変で、文字の樹海から抜け出せなくなってしまう。病気の山を眺め、大きな道筋に当たりをつけてから登ろう。その道筋のつけ方を教えてくれるのが、この本である。

2012年10月

深山正久